



ショートコメント

★★★★

Data 2024-16

監督・脚本：ビクトル・エリセ

出演：マノロ・ソロ／ホセ・
コロナド／アナ・トレ
ント／ペトラ・マルテ
ィネス／マリア・レオ
ン／マリオ・バルド／
エレナ・ミケル／アン
トニオ・デチェント

瞳をとじて

2023年／スペイン映画
配給：ギャガ／169分

2024（令和6）年2月12日鑑賞

TOHO シネマズ西宮 OS

みどころ

スペインにビクトル・エリセという巨匠がいたことを、本作ではじめて知ることに・・・。

それにしても、50年前に子役で起用した女の子（女優）を、50年後の“続編”とも言うべき本作に再度起用するとは、何とも大胆！もっとも、そんな“接点”を作れば、「かつての親友は、なぜ姿を消したのか——。未完のフィルムが呼び起こす、記憶をめぐるヒューマンミステリー」たる本作の脚本は完璧に・・・？

さあ、ラストで上映される“未完のフィルム”に注目！その上映によって失われた記憶は戻ってくるのだろうか？そんな含蓄の深いクライマックスは、あなた自身の目でしっかりと！

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

◆ビクトル・エリセって一体誰？チラシには『ミツバチのささやき』の巨匠ビクトル・エリセが贈る31年ぶりの長編新作にして集大成、遂に公開！」とあるが、寡聞にして、私はまったく知らなかった。チラシには「1985年、伝説のミニシアター“シネ・ヴィヴァン・六本木”で記録的な動員を打ち立て社会現象を巻き起こし、今もなおタイムレスな名作として多くの映画ファンの「人生ベスト」に選ばれる『ミツバチのささやき』のビクトル・エリセ監督が、第76回カンヌ国際映画祭で31年ぶりの長編新作を発表。世界が騒然、そして歓喜する声に包まれた。」と書いてある。

もっとも、1940年生まれの彼は1973年の長編デビュー作『ミツバチのささやき』で高い評価を受けたものの、作品数は少なく、第4作目となる本作は31年ぶりになるらしいから、私が彼を知らなくても仕方がない。しかし、本作のパンフレットには、本作品と同監督について、濱口竜介×深田晃司×三宅唱が6頁に渡って「Special Talk」を展開しているので、これは必読！ビクトル・エリセ監督についてしっかりと勉強した上で、本作をしっかり鑑賞しなければ・・・。

◆本作は、「かつての親友は、なぜ姿を消したのか——。未完のフィルムが呼び起こす、記憶をめぐるヒューマンミステリー」だ。そして、チラシによると、そのストーリーは次のとおりだ。

映画『別れのまなざし』の撮影中に主演俳優フリオ・アレナスが失踪した。それから 22 年、当時の映画監督でありフリオの親友でもあったミゲルはかつての人気俳優失踪事件の謎を追う TV 番組から証言者として出演依頼を受ける。取材に協力するミゲルは次第にフリオと過ごした青春時代を、そして自らの半生を追想する。そして番組終了後、一通の思わぬ情報が寄せられた。——「フリオによく似た男が海辺の施設にいる。」

他方、本作には『ミツバチのささやき』で見出された、当時子役だったアナ・トレントが 50 年ぶりに、失踪したフリオの娘アナの名前で登場しているようだ。なるほど、なるほど。それなら 50 年前の『ミツバチのささやき』を下敷きにして、「かつての親友は、なぜ姿を消したのか——。未完のフィルムが呼び起こす、記憶をめぐるヒューマンミステリー」の物語（脚本）を紡ぎ出すことは可能だ。それにしても、それだけの物語が 169 分の長尺になったのは一体なぜ・・・？

◆パンフレットによれば、本作の登場人物キャラクターは、ミゲルの飼い犬カリを含めて次の通りだ。



◆これを見れば明らかな通り、本作前半は、ほぼミゲル（マノロ・ソロ）の独り舞台だが、

「フリオによく似た男が海辺の施設にいる」との情報を得た後は、やっとミゲルとフリオ（ホセ・コ罗纳ド）との“共演”が始まるとともに、海の近くにある老人介護施設での2人の再会の姿が描かれるので、それに注目！

◆日本は四方を海に囲まれた島国。そのうえ、北海道、本州、四国、九州という4つの島で構成されているから、そのそれぞれが海に囲まれている。それに対して、ヨーロッパはイギリスだけは島国だが、その他の1つ1つの国は大陸内で国境を接して存在しているから、例えばドイツは日本の長野県と同じように、全く海を知らない国だ。もっとも、イタリアは半島だから三方が海に面しているし、フランスも南の方は海に面している。そう考えると、スペインはかつてポルトガルと共に「大航海時代」の先駆者となった国だから、西の方が海に面しているのは当然だ。

しかして、「かつての親友は、なぜ姿を消したのか——。未完のフィルムが呼び起こす、記憶をめぐるヒューマンミステリー」たる本作のキーワードは海、そして船員だ。つまり、「フリオによく似た男が海辺の施設にいる。」との情報を頼りにミゲルが赴いたのは、海辺にある老人介護施設だが、そのシスター・コンスエロ（ペトラ・マルティネス）は行き倒れになっていた男を助け、ガルデルと名付けたそう。しかして、なぜこの男は海辺に倒れていたの？本作後半はこの老人介護施設が海辺のすぐ近くにあるという“立地”が大きなポイントになるうえ、スペイン特有の美しい海を大スクリーン上でたっぷり眺めることができるので、それにも注目したい。

◆劇中劇は面白い。それが私の持論だが、本作では、ラストに映画監督のミゲルがフリオを主演俳優として撮影していたにもかかわらず、その本人が失踪してしまったため、「未完のフィルム」になってしまった映画『別れのまなざし』が、老人介護施設の近くの町の映画館で上映されるので、それに注目！

『別れのまなざし』のラストシーンは、主人公のフェラン（ホセ・マリア・パウ）と行方がわからなくなってしまった彼の中国人の娘チャオ・シュー（ベネシア・フランスコ）との再会のシーンになる。映画の撮影手順は作品や監督によっていろいろだが、『別れのまなざし』の撮影について、ミゲル監督はラストのハイライトシーンを先に撮影していたらしい。未完成に終わったため、31年前に“お蔵入り”していたフィルムがそのまま撮影できる状態で残っていたこと自体が奇跡だが、本作ラストは観客数わずか数名の関係者のみでのその上映会がハイライトシーンになるので、それに注目！

フリオはすべての記憶を失って、今、老人介護施設の中で日々の小遣いを稼ぎながらそれなりに充実した生活を送っていたが、果たして『別れのまなざし』を見れば、昔の記憶は蘇ってくるのだろうか？含蓄の深い本作ラストの展開は、あなた自身の目でじっくり確認しながら味わいたい。

2024（令和6）年2月14日記